



Title	適応指導教室の心理療法的機能 - 適応指導教室から教育学部を考える -
Author(s)	新里, 里春; 市井, 雅哉; 富永, 大介; 金城, 昇; 服部, 洋一; 平田, 幹夫; シャイヤステ, 榮子
Citation	琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要(10): 171-178
Issue Date	2003-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/13649
Rights	



適応指導教室の心理療法的機能

— 適応指導教室から教育学部を考える —

新里里春* 市井雅哉* 富永大介* 金城 昇*

服部洋一* 平田幹夫*

シャイヤステ榮子*

Psychotherapeutic functions of adjustment classes

—Some thoughts on teacher training curricula of the Department—

SHINZATO, Rishun ICHII, Masaya TOMINAGA, Daisuke

KINJO, Noboru HATTORI, Yoichi HIRATA, Mikio

SHAYESTEH, Yoko

はじめに

本報告の目的は、適応指導教室の機能、活動の種類・内容、これらの活動の心理療法的側面の検討、及びこれらの活動の教育学部での実践可能性を検討をすることである。

I 研究対象施設及び方法

本研究の対象施設は下記の適応指導教室とA市青少年センターである：那覇市青少年センター、那覇市教育研究所適応指導教室、糸満市教育研究所適応指導教室、島尻教育事務所教育研究所適応指導教室、浦添市教育研究所適応指導教室、沖縄市教育研究所適応指導教室、具志川市教育研究所適応指導教室、名護市教育研究所適応指導教室。さらに、下記の文部科学省発行の報告書に報告された施設である：適応指導教室研究

委託研究実績報告（2000年）：大垣市教育研究所適応指導教室、畑野市教育研究所適応指導教室、上越市教育研究所適応指導教室、大分県教育研究所適応指導教室、福岡市教育研究所適応指導教室、茨城市教育研究所適応指導教室、金沢市教育研究所適応指導教室。

研究方法は文献研究と面接による方法を取った。面接調査の対象者は、上記沖縄県内の適応指導教室と青少年センターの指導員であった。

II 適応指導教室の機能

本報告の理論的背景は、本邦で最も初期から適応指導教室を運営してきた相場ら（1998）の研究に負っている。適応指導教室の機能は全て心理療法的機能として理解できるが、これらをあえて分類すると、1、コンテナ機能、2、繋ぎ機能、及び3、いわゆる心理療法機能である。

*琉球大学教育学部

1 適応指導教室のコンテナ機能（心の居場所）

適応指導教室の機能の第1は、不登校を受容する「コンテナ」(container)である。心理療法の機能の一つはクライアントを安心させることである。適応指導教室は家庭と同程度に安心できる場所と言える。全ての向社会的学習は安心・安全な状況下で可能である。引き籠もりや不安な生徒に先ず必要なことは安心させることである。適応指導教室の場所・職員は全て子どもを安心させるように工夫している。子どもが安心できる場所をコンテナと言う。

1) 指導員の機能・役割

特に情緒的問題を有する適応指導教室に通級中の児童・生徒のストレス反応の特に不安やうつ状態・心身症を癒す心は「温かさ」である。情緒的問題を有する児童生徒には、いわゆる健康な子どもよりも「温かさ」が必要である。

明るくゲームしたり観劇をしている児童・生徒には、隣で一緒に感動してくれる人が必要である。適応指導教室には温かい心の居場所をつくる機能が要求されていると考えられる。

渡具知(2001)の研究において、適応指導教室通級生の適応指導教室についてのイメージを調べた結果、通級生は適応指導教室に受容されていると認知していた。適応指導教室は通級生の心理的事実を「あるがまま」に認める場所だと言える。

通級生は今の状態を批判されない、強制されない、一人でパソコンに打ち込んでいるのもよし、他の人が卓球しているのを見るのもよし、といった指導員の受容を感じている。

家にいると、親から「早く学校に行きなさい」と言われるので学校に行くと、皆にいじめられる。適応指導教室は、条件を付けられない「居場所」として肌で感じている。適応指導教室の指導員は心の配慮をする役割をその基本として担っている。

指導員は、一人一人の子どもが傷つきやすい領域、苦手な領域、何から逃げようとしているのか等々の診断的評価を元に、子ども一人一人に関わる。そういったきめ細かな配慮をしてい

る。

2) 同類の癒し機能

断酒会を初めとして世間にはセルフ・ヘルプ・グループが沢山ある。セルフ・ヘルプ・グループは同類の癒し機能を活用した組織と言える。

参加者は当初、遠慮がちに参加するが、支える会、セルフヘルプグループ等の地域の集まりに参加して皆と話している間に、「自分一人ではないのだ」という一種の安心感を体験し癒される居場所を確保していく。

3) 短時間通級の癒し機能

学校では、4時間から6時間の学校生活を強制される。しかし、対人関係を断ってきた児童・生徒には短時間活動に意味がある。適応指導教室の活動は2時限か3時限程度である。それ以上だとあまり機能しない。ストレスのある状況で2時間位はどうにか頑張れて、がんばったという達成感も得られる。そしてまた家で引籠る。

相談員が引籠っている子どもに対して新しい活動・学習等を注入すること自体ストレスである。適応指導教室に来ること自体ある意味ではストレスなので、2、3時間位で終了するのが適当である。

2 適応指導教室の繋ぎ機能

適応指導教室の機能として中間または繋ぎ機能がある。中間または繋ぎとは家庭と学校、及び適応指導教室と学校の間において両者間を繋ぐ機能である。

(1) 相談室と適応指導教室を繋ぐ機能

各教育委員会には相談室がある。多くの不登校生は最初に相談室で相談を受ける。その後少し元気がでたり、他の人と関わりたい欲求が出た状態になると、適応指導教室への移行となる。

相談室と学校の間施設、中間的な機能を備えた施設が適応指導教室である。相談室は家庭と適応指導教室の中間施設である。

(2) 適応指導教室と学校を繋ぐ機能

適応指導教室はずっと適応指導教室に留まることを求めている場所ではなく、適応指導教室から学校への繋ぎの機能を持っている。相談員は生徒の学級復帰を目標に指導に当たっていると書いても過言でない。その機能は生徒への関わりと学級担任・養護教諭等との関わりを要し、生徒への関わりと異なる技能が要求される。これは学校では主事または主任の役割と同じである。それゆえに指導員にとっては骨の折れる仕事と言える。

(3) 孤独と集団を繋ぐ機能

適応指導教室の中間機能の第4の機能は、孤独と集団を繋ぐ機能である。孤独とは主に自宅に引籠っている状態である。引籠りは、ほとんど家に一人でいたり、外を出歩かない生活に対し、適応指導教室は複数が通級しているので、集団との接触が増える。

当初は個として勉強に没頭したり、何人かがトランプに興じている側で一人で漫画に没頭する者もいる。適応指導教室は孤独（集団の中での引籠り）もすべて許される空間ではあるが、徐々に個と集団を繋いでいく活動や役割が提供されて集団生活に適応していく。すなわち、適応指導教室は学校の学級にはない、孤独と集団の繋ぎ機能がある。

(4) タテ関係からヨコ関係への移行機能

不登校生が家に引籠っていると、両親との主従関係だけがある。親から「学校に行きなさい」「テレビゲームだけしないで本でも読んだら」等々の上下関係の上からの命令だけで関わられてきた子どもが、適応指導教室でゲーム、スポーツ、その他の活動に参加することによって、友だちとのヨコの関係へと移行する。そういう働きかけや機能が、タテからヨコの関係への移行機能である。

(5) 不適応と適応の繋ぎ機能

第5の繋ぎ機能は、これまでの不適応的な生き方、不適応的対人技能、あるいは不適応的心

性から、対人関係が良くなり、自分が自分らしくなり、そして適応的な生き方の出来る状態とを繋ぐことである。

III 適応指導教室の活動

1 いわゆる教科学習

適応指導教室の活動を大別すると2つある。その1つは「クライアント・センタード学習」である。その2は教科外活動である。学校の授業は先生の指導案に沿って一律になされる。一斉授業から落ちこぼれた子どもたちがどんどん問題を抱えて非行化したり、問題を抱える。

適応指導教室では、生徒の今のレベルに合った、そして本人の好きなものから学習させるクライアント中心教育をしている。Rogers（友田、1972）は学習者中心の授業方法が学習のみならず心理的な成長にも繋がることを強調した。適応指導教室の学習支援は学習者中心の理念で効果を挙げている。その結果、不登校生が適応指導教室から高校受験をして、高校では活発な高校生活を送る例が多い。

教育学部には10教科があり、それらを指導するのが教育学部であると言っても過言ではない。

2 教科外活動

適応指導教室では実に多岐に渡る活動がなされている。それらは、スポーツ活動、諸ゲーム、野外活動（それぞれの地域を生かした活動が実践されている）、製作活動等である。

(1) 室内活動

室内活動では「諸ゲーム」、いわゆるトランプ遊び等様々なゲームがある。手作業では、手芸、調理、陶芸、創作活動、それから音楽活動をする。教育学部には、ゲームを扱う学科は無いが、調理は家政科で指導されている。陶芸や創作活動は美術工芸科で取り上げられている。音楽は音楽教育専修と教育カウンセリングコースで提供されている。

1) 諸ゲーム

「遊びの治癒力」は遊戯療法ですでに実証済みである。人は遊びの中で色々な学びもしている。適応指導教室で子どもたちは、保護された空間で遊んで、そして勉強の「傷つき」を意識しないで、遊びそのものに伴う感情、身体表現で癒されていく。

カイヨフ (Hommes, 1970) の遊びの分類には、模倣の遊びがあり、遊びから何かを学んでいると言われている。遊びから学んでいるのは対人関係のノーハウ (上下関係や横の関係)、勝ち負けの悔しさ、感情表現・喜怒哀楽を表現して良いこと、勝つ楽しさ、負ける悔しさ、実力の有る無しのおぼろげ (現実検討力) 等である。

次に、通級生は遊びやゲームでルールを学ぶ。すべての遊びにはルールがあって、それが無いとうまくいかない。鬼ごっこだってルールがないと成り立たない。遊びやゲームからルール、けじめ等を学び、そして社会性を獲得していく。この社会性等の学習プロセスが適応指導教室で提供されている。

子どもの心理療法としては遊びの要素を取り入れた遊戯療法が精神療法の開発初期の頃から発展してきた。教育学部は小学校教員養成をしていながら遊びの専門家はいないし、遊びの教科もない。このことは子どもの研究においても由々しき問題であると言いたい。

2) 手作業・製作活動

手作業には、木工、壁画製作、小物作り、染物、紙鋏き、料理等多岐に渡る活動がある。物づくり・製作・手作業の機能について考察してみたい。精神分析の創始者フロイトは「人間の心の問題は愛情のもつれだ。」と精神分析の性理論を唱えた。性理論は「愛情」という言葉が妥当と言える。しかし、愛情には多岐にわたる定義があるために科学的な用語としては馴染まない。しかし、現実には親子間の愛情、友人関係の愛情、友情、上下関係の師弟愛、さまざまな愛情が我々の心の「もつれ」を形成している。

遊びの治癒力やゲームの治癒力は友人関係、師弟関係の中で成される。そしてその愛情プラ

ス技能を身につけて社会人としての自尊感情を高める。フロイトと一時期共に精神分析を研究したアドラーは、人は愛情のもつれだけで神経症になるのではない、「劣等感」が神経症の原因であるとした。

人は出生以来常に親や教師・先輩から技能を学んできた。挨拶の仕方、箸やフォークでの食事の仕方、その他の生活技術・社会 (対人関係の) 技術、挨拶の仕方、友だちへの声かけの仕方等々が出来ないために不登校に陥る者もいる。友達にいじめられた時に、「そういうことをするな。」とアサーションが出来ないためにいじめられる。

社会技能は親から学ぶべきものだが、核家族・少子家族、そして親が忙しい中で、子どもたちは社会技能をあまり学んでいない。その結果は、有効感、有能感、コンピテンス、自信の低下に至る。

さて、製作作業・手作業と同列にあるのが遊びの技術である。「いきいき自然体験キャンプ」のなかでフロイトに乗れたことも自信に繋がる。どんなことでも達成感につながる事が大切である。

適応指導教室では指導員からの愛情とスキル獲得から得られる有能感の獲得が適切に織り込まれている。

手作業の一つの重要な側面は、認知的学習に比べて成果が現れやすいことである。そして、即座に自己効力感が高まる。

手作業のもう一つの側面は、多くの製作作業で複数の人が共に関わっていることである。手作業は、協働者との共同作業・学習が基本である。その時の対人関係は主に横の関係である。そのプロセスで協調性の心を成長させる。

そして1日だけ早く学んだ子は、その次の日に来た子に教えるというリーダーシップも自己成長につながる。一日遅れた子への思いやり・共感性も育むのである。教育学部で物作りを教えている教室には技術教育、美術工芸、家政科がある。技術教育では、木工をはじめ機械工作、電気機械等の物作りを学ぶことが出来る。美術工芸学科では、布作品、陶芸、彫刻、絵画等が

学べる。家政科では布製品作り、料理作り等が学べる。

3) 音楽活動

音楽活動にはいわゆる受身の音楽鑑賞から、自ら楽器演奏をする器楽演奏までである。沖縄県の適応指導教室では、地域のボランティアを活用した三味線の練習・演奏がある。その他のギター、ピアノ、リコーダ等（弾き語り含む）などは多くの適応指導教室で実践されている。

音楽活動は近年、音楽療法としてその効果は科学的に認知され始めている。教育学部の音楽科と教育カウンセリングコースでは音楽療法が学べるが、ピアノ、ギター等が定番である。三線は非常勤講師から学べる。沖縄の器楽演奏のレパートリー開発が今後の課題と言えよう。

(2) 室外活動

室外活動にはスポーツ活動、栽培活動、野外キャンプ、遠足、奉仕活動がある。地域の特色を生かした活動としては、雪国のスキーや沖縄青年の家でのカヌー、水泳、マリッジットやドラゴンボート乗りがある。それぞれの地域に根ざしたものを通して、子どもたちが生き生きする活動を取り入れている。

保健体育学科ではスポーツ、レクリエーション（野外キャンプを含む）、技術教育では栽培活動が提供されている。奉仕活動は教育学部では教えていないので、「奉仕等体験」は学外の福祉施設に依頼している。遠足は学校行事の一つであるが、教育学部では、合宿研修として野外キャンプを実施している。カヌーやマリッジットは、合宿研修を渡嘉敷青年の家で実施する時は取り入れられている。

1) スポーツ活動

スポーツ活動には室内と室外の両方がある。室内で最も多いのは卓球で、体育館ではバレーボール、バスケットボール、バドミントン、テニス等が定番である。

室外では、キャッチボール、野球、ソフトボール、サッカー、グランドゴルフ等、多数ある。

教育学部の保健体育科の教員は共通教育の保健体育から教員養成課程のための専門の体育まで、上記以外に室内では、ラート、空手、ウエイトトレーニング、エアロビックス、琉球舞踊、室外ではサッカー、ゴルフ等のスポーツやレクレーションを指導している。適応指導教室の活動には大いに貢献できると言える。

2) ガーデニング・菜園活動

ほとんどの施設で毎日のようになされている活動は、ガーデニング・菜園である。そしてその中でも人気のあるのは、プランターに季節の花を植え、毎日その手入れをする作業である。どこの適応指導教室でも、教室の周囲はきれいな花で囲まれていた。通級生の日課は花の手入れから始まるところも多い。花を愛でる活動は、種子撒きから水撒きまで、花への愛情を与える活動であり、愛情の成果がゆっくりではあるが、確実に返ってこることがその特徴である。

その他の菜園では、野菜や芋栽培など、その地域の特徴的な野菜などが栽培されていた。菜園活動は、作業療法の中でも生き物を育てる点で、通級生には生命を大事にする教育の一環として、また栽培したものを共に料理する料理活動として、心の教育には有効な方法と言える。

教育学部の技術教育学科ではビニールハウスで果菜栽培をしている。

3) 野外キャンプ

野外キャンプは室外活動の全ての要素が入っている。教育学部の合宿研修では、保健体育学科を中心に学部を挙げて関わっている。本学では共通教育で「キャンプ」が提供されているが、本学部の教科には現在のところ「野外活動」（キャンプ）に関する科目はない。

4) 遠足

これは優れた学校行事であるが、教育学部では特に扱っていない。しかし、近年高等学校の修学旅行についての取り組みが社会科を中心になされている。これは平和教育として戦跡を中心になされているが、今後は適応指導教室で取

り組んでいる地域への遠足に関する取り組みも必要であろう。適応指導教室の遠足は地域を理解する営みとして地域の人材も活用されていて、総合的学習の時間とも連動するものであり、この方面のカリキュラム開発が本学部の課題として挙げられよう。

5) 奉仕活動

福岡市の取り組みは、事前授業として「構成的グループ・エンカウンター」によるスキルの開発をしているが、これは奉仕活動そのもの以上の成果がある。通級生はややもすると「他者の愛情を受ける」嫌いがあるが、奉仕活動はそれを他者に与える」姿勢・態度の形成になるものとして高く評価されるであろう。教育学部では様々なボランティア活動が「フレンドシップ事業」として実践されているが、その中には養護施設への派遣がある。教員養成として「介護等実践」が義務付けられているが、これは福祉施設等に依存した実習であり、今後介護に関する授業も模索される必要がある。

IV 適応指導教室の活動の心理療法としての位置付け

適応指導教室の活動には、教科学習、総合的な学習、そしてスポーツ等のいわゆる学校教育がある。それ以外の活動は本格的な心理療法として、クライアント中心療法、精神分析的精神療法、箱庭療法等が実践されている。

それ以外に「集団療法」もしている。福岡市の適応指導教室では「構成的グループ・エンカウンター」も実践されている。そこでは障害児の施設に訪問していくまでのプロセスを扱っている。

さらに「ピア・カウンセリング」を取り入れている適応指導教室もある。上級生が下級生のカウンセラーになって、相談に当る方法である。

本報告で取り上げたその他の活動を心理療法として分類した場合、室内ゲームは遊戯療法と言える。室内での音楽活動は音楽療法、種々の手作業・製作活動は「芸術療法」であったり

「作業療法」であったり、いずれにも分類可能である。

菜園は近年「園芸療法」と命名されている。キャンプ・野外活動は生活療法あるいはソーシャル・スキル・トレーニング（行動療法）である。奉仕活動・ボランティア活動もソーシャル・スキル・トレーニングに分類可能である。

適応指導教室では、子どもたちだけではなくて家族にも関わる「家族療法」も実施している。家族療法として、様々な関わり方が実践されている。

最後に、保護者と教員へのコンサルテーションがある。子どもの現状を説明し、関わり方を教師にアドバイスすることをコンサルテーションと言い、同じことを親にする場合もコンサルテーションである。先生や親に対して、相談員の「子ども理解」に基づいたコンサルテーションは、適切になされないと、学校や家庭との連携を危うくするので、注意を要する。この領域は高度な専門的な営みの一つである。

V 考察

本報告は文部省発行の適応指導教室研究委託研究実績報告集と他県の教育研究所の報告及び沖縄県の7適応指導教室、そして1青少年センターでの聞き取り調査に基づいている。また、適応指導教室の機能については、相場らの研究に基づいた。

適応指導教室の活動は、文献及び聞き取り調査で明らかになったが、それらが心理療法としてどの位置にあるかは文献や適応指導教室の職員からは窺い知ることが出来なかった。そのことが適応指導教室の職員の心理療法の教育・訓練の問題でもあることが示唆されたが、本報告では取り上げなかった。その代わり、諸活動については、既存の心理療法と対比した一般論しか記述出来なかった。その理由は、室内ゲーム一つを取っても、それぞれ異なった心理的効果が推測できるが、今回は一括りにして報告するに留めたからである。個々の活動を心理学的に分析する作業は、今後の課題としたい。

次に、適応指導教室の活動と本学部の教科活動との関係であるが、これも推測の域を出なかった。いわゆる主要6科目の教科活動は別にして、音楽教育、美術教育、保健体育教育、技術教育、及び家政教育の各教科は、適応指導教室の活動と対応していることが、本研究の大きな発見であった。

しかし学部教育は教員というプロ養成であるので、適応指導教室に応用するときには視点の転換を要する。これに成功しているのは、教育カウンセリングコースの音楽療法サブコースである。音楽療法の資格を目指している学生は、1年次から知的障害者等の教育施設にボランティアとして参加し、障害者の目線で音楽療法を実践している。

筆者が沖縄県教育センターの適応指導教室に関与した時に、教育センターのキャンパスと指導員が一大適応指導教室を構成していることを知った。それが可能であった理由は、当時の所長をはじめすべての指導主事が、適応指導教室のスタッフだけでなく、自分たちも適応指導教室の一員として関わっていると言う姿勢があったものと思われる。

最後に、本研究の今後の課題の一つは、適応指導教室のそれぞれの活動の心理的な効果を明らかにすることである。第二の課題は、本学部の教官と学生の人的資源を適応指導教室として活用できる可能性を追求することである。

VI 引用文献

相馬誠一・花井正樹・倉淵泰佑編著、適応指導教室一よみがえる「登校拒否」の子どもたち一、学事出版1998。

渡具知希(2000)：一般中学校生および不登校中学校生の自己受容・他者からの受容と他者志向自我状態との関連性およびPAC分析によるこれらの検討、琉球大学大学院教育学研究科修士論文。

Hommes, Les (清水幾太郎・霧生和夫訳(1970)：Rカイヨワ遊びと人間、岩波書店)
Rogers, C. R (友田不二男・他：ロージャズ

全集別刊第4, 5集 創造の教育(上)(下), 岩崎学術出版社, 1972。

VII 参考文献

文部省(2000)：適応指導教室研究委託研究実績報告から引用した委員会の報告：群馬県教育委員会、富山県永見市教育委員会、鳥取県教育委員会、徳島県小松島市・勝浦町・上勝町教育委員会、北海道札幌市・岩見沢市・千歳市・北広島市教育委員会、富山県永見市教育委員会、鳥取県群島教育委員会、青森県教育委員会・高森山授業研究センター、岩手県山田町教育委員会・花見町教育委員会、宮城県仙台市・柴田町・矢本町・桃生群河北地区教育委員会、山形県山形市・遊佐町教育委員会、福島県福島市・原町市教育委員会、岐阜県中津川市・美濃加茂市教育委員会、大阪府・大阪市・高槻市・守口市・和泉市教育委員会、福岡県教育センター、福岡市・北九州市・大野城市・久留米市・大川市教育委員会、宮崎県教育委員会、鹿児島県川内市・名瀬市教育委員会、沖縄県教育センター、那覇市立教育研究所)。

糸満市教育研究所・適応指導教室報告書
浦添市教育研究所・適応指導教室報告書
大分県教育センター紀要第29集、適応指導教室「ボランの広場」に通級する子どもの社会性の発達を促す個別指導、平成10年3月。

沖縄市教育研究所(2001)：平成12年度適応指導教室報告書。

宜野湾市教育研究所(2002)：平成13年度適応指導教室報告書。

具志川市教育研究所(2002)：平成13年度適応指導教室報告書。

名護市教育研究所(2002)：平成13年度適応指導教室報告書。

那覇市教育研究所(2002)：平成13年度那覇市適応指導教室報告書。

南部広域行政組合教育委員会島尻教育研究所(2002)：平成13年度適応指導教室「しのもめ教室」実践事例報告書

福岡市教育センター：体験活動を重視した適応
指導教室の実践的研究Ⅱ－総合的な体験活動
を中心に－、平成12年3月。

謝辞：本研究は平成13年度琉球大学重点化経費
の一部の援助を頂いた。ここに記して感謝を申
し上げる。